

## 英語読本に育まれた明治の文学精神 2

川戸 道昭

### 三 木下尚江『良人の自白』

英語教科書のことでもう一つ注目しなければならぬのは、それが、単に文学愛好家ばかりか、旧制中学校程度の教育を受けるすべての適性・傾向をそなえた生徒たちの手にする教科書であったということである。「マツチ売りの少女」のような悲しい話があるいは「イザベラ・エンド・アイ」といった淡い恋物語が、そのような多種多様な生徒の一生に「どう響いたか」、それは長谷川如是閑もいうように「十人十色」ということになるだろうが、少なくともそれほど大勢の生徒が目にしたということは、その影響の仕方にも一様ではないものがあつたと思われる。その影響の範囲を確認するために、ここでは一つ、明治二年生まれの小説家にして社会運動家の木下尚江の書いた自伝風小説『良人の自白』(明治三十七年〜三十九年)という作品を例に取ってみることにしよう。明治期の社会小説を代表するといわれるこの小説には、恐らくは木下自身がモデルと考えられる主人公・白井俊三が、英語読本から受けた生涯忘れられぬ深い感銘を次のような熱烈な口調で吐露する回想場面がでてくる。

『俊三の心は復た直に当年の中学に返つて、其記憶を辿るのである、』——今は教科書の任務も、剥がれて、図書室の片隅に棄てられ

て、恐く永久手にする人も無かるべき彼の読本よ、我れ俊三の為には終生新たなる貴重の聖典である、偶然寄舎に携へ帰つて、偶然机上に繙いた、目に入つたのは「ヨリヴァー、クロムウエル」の一章——我は何の気なしに一字々々読みもて行つた、好文字、珍事実、我心の鼓動は漸く高くなつた……

即ち記者は斯う書いて居た、

「何故に大王チャールスは倒れて、賤しきクロムウエルは大統督に上つたか、チャールスの倒れたのは是れである、彼は成長なつても、矢張幼少かつた時の如くに、『人は総て我兄弟だ』との感情を馬鹿にして居た、彼は臣民と云ふものは、自分の支配する為めに製造されたものと思つて居た、

クロムウエルの起つたのは是れである、彼は第一に同胞の権利自由と云ふことを念掛けて戦つた、其りや彼にも過失は多かつたけれど」

我は一心に之を読んだ、読み返へした、暗記した、晩飯なんぞ食いたくない、明日の課業の準備なぞ如何でも可い、……然う、同胞の権利自由の為に——彼は果して何を為して可いのであろうか、何を学んで可いのであろうか、……我は僅に黒雲を払ひ除けて、只管母が慈愛の上に立つて、革命の大業を考へた、「同胞の権利自由の為に戦ふべく我は何を学ぶべき乎」——大発見の歓喜を以て「法律々々」と決定したのである、——是れは如何に笑はれても実に仕様が無いのである(『木下尚江集』明治文学全集45〔筑摩書房、一九六五年〕三七〜三八頁)

主人公の俊三が、英語読本でクロムウエルの事績を読んで己の将来の方向を決定する様子が、中学時代のほとぼしる感情もそのままに熱のこもった口調で語られている。彼は、中学校の図書室から英語読本を借りて「ヨリヴァー、クロムウエル」の一章読んだということだが、その「ヨリヴァー、クロムウエル」が掲載された「読本」とは一体いかなる読本か。それは、木村毅も指摘するとおり、明治二十年前後から中学の教場で盛んに用いられた『スウィントン第五読本』であった。「オリヴァー・クロムウエル」の一篇はその十八課、十九課の二課にわたって掲げられている。それを書いたのはアメリカの文豪ナサニエル・ホーソーン（有名な『伝記物語』の一節）で、俊三の決心を促すキーワードとなった「同胞の権利自由の為に」という言葉は、そこにある「for the rights and freedom of his fellowmen」をそのまま直訳したものであった。俊三はわずか教語のこの言葉の中に神の啓示ともいふべき意味を見だし、己の進むべき将来の方向を法律の道と思ひ定めていったのである。

俊三の回想によれば、彼がクロムウエルについて知ったのは、「我れ十六歳の青春」のころであったという。その当時、彼はどうしても解決できない一つの疑問をかかえていた。それは、母の話した、昔の天皇は「神様であつたが、御維新以来人に御なりあそばした」ということに端を発する疑問で、なぜそのような変化が生じたのか俊三はその原因をつきとめずにはいらなかった。そこで、学校の「倫理科の教授に其説明を求めた」ところ、返ってきた答えは、「一

言「其様こと言ふと不敬に当る」ぞ、というものであった。仕方なしに彼は自らの疑問に対する独自の調査を開始する。そしてその中で出会ったのがクロムウエルであったというわけである。俊三が中学時代の英語「読本」のことを「終生新たな貴重の聖典」とまでいつてあがめているのは、それが彼に新しい国家と国民のあり方について教えてくれた二つと得がたき教典であったためである。しかし、それと同時に心に生じてきたのは、自らの真剣な問いに対し口を閉ざして一切教えてくれようとしなない教師に対する激しい憤りであった。そのような大事な疑問に答えることが出来ないなんて、彼らは一体何のために存在するのか。俊三はそうした憤りをそのまま態度に現して、彼らへの不満をあらわにしていった。そして、その結果、「修身点の少なき為に復た級中の首席を占めることが出来なく」なってしまうのである。

これが一篇の小説の中の出来事にとどまらず、作者自身の体験をもとにした話であったことは、そこに記されている事柄と木下の学生時代の歩みが多く点で重なり合っていることをみてもわかる。木下は信州松本の生まれで、同地の中学校に在学中に、クロムウエルの言動にふれて共和主義に共鳴する。その頃の彼の行動を伝える資料で、最近わたしは大変重要な資料を発見した。それは、「明治一七年一月」から「七月」までの六カ月間にわたる「東筑摩中学校」の学期末調査表で、そこには木下が「初等中学科三年前期」に在学した当時の出席日数や各教科の成績がすべて記載されている。そのときの木下の年齢は「一四」年「一一」カ月。

つまり数え年に直すかと一、二カ月で、一六歳に達しようというときの学期末調査表である。彼は、同じ「三年前期」に所属する生徒九名のなかで最年少の生徒であったが、成績のほうは九名中一番。科目別にみると、英語の点数が「二六七」点と、一見したところあまりよくないようにみえるが、平均が「四二二」点と低く、やはり九名中一番であった。ほかに漢文や歴史、物理といったところが得意科目であったようで、すべて一番の成績を収めている。他の生徒がみな「一六」年、「一七」年、「一八」年というように二年も三年も年長であったことを考えると、その秀才ぶりは相当なものであったと考えていいだろう。

この調査票が貴重なのは、そこに記されている成績や出席日数が、それまで「級中の首席を占め」ていたという『良人の自白』に記されている事柄と、木下自身の体験の同一性を証拠づける一つの重要な資料となっているためである。つまり、この調査表は彼が校内第一の「従順児」から手のつけられない一大反逆児へと変化をとげる直前の調査表であったというわけだ。ちなみに、そのときの「修身」の評点は「九六」点といまだ高く、クラス中一番目の成績であった。このように『良人の自白』という作品には木下自身の中学時代の体験をもとに描かれた部分が少なくないのだが、その一方で、そこには実際の経験とは異なるフィクションも少なからず含まれている。たとえば、作品の年代設定もそのひとつである。作中、俊三がクロムウエルと出会うのは帝国憲法の発布される翌年、すなわち明治二十三年ということになっているが、実際は彼が中学

三年に在学した明治十七、八年のことであった。さらに、それを知ったのが英語の「読本」<sup>リットル</sup>であったというのも、おそらくは、明治二十三年という年代設定に合わせたフィクションであったろう。そのことは、先の「オリヴァー・クロムウエル」を掲載した『スウィントン第五読本』が日本の教場で使われはじめるのが、明治二十年代に入ってからのことであったということからも容易に推測できる。同書の翻刻書で現在確認されている最も古いものは明治二十一年刊行の戸田直秀の版で、それ以前には同書は一般にはあまり流布していなかったことがうかがわれる。

では、『スウィントン第五読本』によってではなかったとすると、木下は一体なによつてクロムウエルのことを知ったのか。彼の自伝の『懺悔』をみると、そこには「万国史の教室に於て予は図らずも此の人に面会した」ということが記されている。要するに、「万国史」の授業で用いられていた教科書で彼はクロムウエルのことを知ったというわけだが、木下にとつてその教科書は単なる歴史の教科書とは違っていた。その域をはるかに超えた、のちに社会運動家・小説家としての彼が、自らの精神に一大革命をもたらした書物と回想する、彼の将来の方向を決定づけたといつても過言ではないような書物であった。『懺悔』の記述に従えば、そこには彼の魂に衝撃を走らせるこんな内容が記されていた。

《予は彼「クロムウエル」が英国王を国会の法廷へ引き出して之に叛逆人の判決を与へ、断頭台上へ引き上げて死刑に行ったことの

顛末を見た時に、恐怖か、驚愕か、賛歌か、名状すべくもあらぬ一種の感慨に打たれて、暫はし身も魂も此世ならぬ夢の裡に酔い痺びれて仕舞つた』(『木下尚江集』明治文学全集45、二二七頁。)

それは木下自身が常日頃目にしている日本の現状とはあまりにもかけ離れた世界であつた。日本では一人の国家元首を過剰なまでに畏れ敬う一方で、よりよき国政を求めて立ち上がるうとする民衆を容赦なく弾圧するという、そこに記されているのはまったく逆の政治が行われていた。彼自身、毎朝学校に通う途中で目撃したのは、そうした「国事犯」の被告人が監獄から裁判所へと引き立てられていく姿であつた。彼はそのような人々の姿を目にして「満身の血が煮え立つて頭を衝いて上ほる」ほどの衝撃を覚えずにはいられなかつた。

《予は又た書物を開いてクロムウエルの事を考へて見ると、彼と此れとの相違の余りの甚しさに驚いた、『有体に描け』と画工を叱りつけたる其の陰鬱な豪毅獐猛なる瘡男の肖像を見つめる時、予の心は堪へ難き重さに圧伏せられて、只だ其の前に平伏して仕舞つた、予は『法律を学ぼう』と決心した、あゝ可愛らしき我心であつたことよ、今の国事犯者が法律で審判かれて居るよ  
うに、クロムウエルも法律を以て国王を審判したものだと思つたのである、予は彼が国王を裁判した其の法律を知りたいものと思つたのである》(『木下尚江集』明治文学全集45、二二七〜八頁)

そして、その決心のとおり彼は、明治十九年の春、東京専門学校(現早稲田大学)へと進学し、二年後にその「邦語法律学科」を卒業することになるのである。

このように、木下尚江という一人の重要な社会運動家・小説家の将来を、さらにはその思想の方向を決定づけるほど大きな意味をもつた歴史教科書とは一体いかなる教科書であつたのか。わたしは、どうしてもそれをつきとめてみないではいられない気持ちにかられて、明治十年代から二十年代にかけて中学校などでよく読まれていた歴史教科書の詳しい調査を行つてみた。その結果、それがウイリアム・スウィントンの『万国史』(Outline of the World's History)に間違いないという事実をつきとめた。その第三章の「GREAT EVENTS OF THE SEVENTEENTH CENTURY (十七世紀の大きな出来事)」の項に五、六ページにわたつてクロムウエルの記述があり、その中に彼が時の国王のチャールズ一世を法廷に引き出して、国民に対する謀反のかどで死罪に処するまでの一連の経過が詳しく述べられている。とくにその決め手となつたのは、『有体に描け』と画工を叱りつけたる其の陰鬱な豪毅獐猛なる瘡男の肖像を見つめる時』という記述で、スウィントンの『万国史』には、クロムウエルが、自分に対する媚びへつらいから顔の「痣」(wart)を省いてしまおうとする画工に対し、「有体に描け ("Paint me as I am!") と命ずる場面があり、その横に彼の肖像画が掲げてある。同じ明治十年代に流行したパーリーの『万国史』(Parley's Universal History)にはそのような記述や肖像は

なく、書かれている内容も、国王の側からクロムウエルを批判する記事が中心となっている。

スウィントンの『万国史』というのは明治十年代の後半から中等教育の教場で盛んに用いられていた歴史教科書で、早くも明治十六年三月にはその翻刻版（岡本直吉版）が刊行されている。木下との関連でここに指摘しておかなければならないのは、それが東京専門学校の「政、法」学科の「入学試験課目」（明治十八年～十九年）に加えられていたという事実である。彼にとつて、その教科書は単に思想の方向を決定するだけではなくて、進学先をも決定する一つの重要なファクターであったというわけだ。ちなみに、「政、法」学科の入試科目は「スウィントン万国史」のほかに、「ユニオン第四読本」と「英文典」との三「課目」で、「スウィントン万国史」の下に「訳読及ヒ翻訳」と出題内容の指示があるところをみると、それは単なる歴史教科書というよりは、「ナショナル」や「スウィントン」などの読本と同様、一種の英語学習のためのテキストという意味あいをふくんだテキストであったことがわかるのである。

ともあれ、彼はこの中学校時代に手にしたスウィントンの『万国史』によってクロムウエルのことを知った。そして、そのことがきっかけとなって彼の将来の方向を「法律」とさだめていくことになったのである。彼は、俊三という分身を使って、その教科書を「終生新たなる貴重の聖典」とまで言わせている。われわれ現代人の感覚からすると、たかが一冊の英語教科書にそれほど重要な意味を見てとるとするのは、驚きをとりこして少々奇異な感じがしないで

もない。しかし当時の時代状況を考えれば、それは奇異でもなんでもないごく当たり前のことであつたと合点がいくはずだ。木下の心情を理解するには、まず、彼のように地方の中学校で少年期を過ごしたものとつて読むべき書物の種類が限られていたということを考えに入れる必要がある。そして同時に、その頃学校で用いられた教科書の大半は国家の干渉や統制のもとになったものであるということも併せて考慮に入れる必要がある。そうした国家による教科書への介入は、木下が中学校を卒業する明治十年代の末以降、ますます強まる傾向にあり、中学校で用いられる教科書はすべて「文部大臣ノ検定シタルモノニ限ルヘシ」（明治十九年四月公布「中学校令」と、国家の検閲を経なければならないことになつていった。

しかし、実際には、この検閲制度は英語以外の教科を対象としたもので、明治二十年代の東京府尋常中学校やその他の中学校がそろつて「ナショナル」、「スウィントン」、「ユニオン」等の各読本を採用しているところをみても、英語教科書には実質的にその統制が及んでいなかったことがわかる。裏を返せば、国家の干渉の及ばない、海外の生の思想や文学がそこには存在したということになる。当時の若者にとつて、とくに情報量の限られた地方の中学生にとつて、それは、国家の、地域の、あるいは家族の因習を脱して広く世界を見通すことのできる数少ない情報源になつていったということができるのである。しかも、そこに掲載されている文章は、ほとんどが欧米に名前の知られた文豪大家の手になるものであつた。それが時に木下のような若者をして信念の行動へ

と突き動かす大きな原動力となったとしても何ら不思議はなかったのである。長谷川如是閑の言葉を借りるならば、少なくとも「日本の読本のように、その逆に行こうとする無意識の反抗を誘うようなものでなかっただけはたしかで」あった。

明治の英語読本や歴史教科書というのは、このように、文学志向の読者のみならず、他のさまざまな分野における前途有為の若者たちの貴重な知識の供給源となっていた。ときに、それは木下の場合のように、将来の方向を決定する重要な契機となることさえあった。とりわけ、そうした英語読本が貴重であったのは、明治三十年代に入って、国家の干渉が英語副読本にまで及び、「ゴルドスミスのヴィカア・オヴ・ウエークフィールドの全部や、アーヴィングのスケッチ・ブック中の数章」が、教室で使用を禁じられる（厨川白村『小泉先生』大正七年一月）ようになってからも、依然として「ナシヨナル」や「スウィントン」といった英語読本だけは目に見える干渉も受けずに世に行われていったためである。明治三十年代、四十年代の国家主義的な色彩の強い教育行政下にあつて、すべてが単一の色合いに染めあげられていく教科書の中で、英語読本だけは変わらずに独自のカラーを保ち続けることができたほとんど唯一の解放地帯とみることができるのである。

#### 四 徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』

以上、「ナシヨナル」、「スウィントン」と当時流行した英語読本を中心に、それが明治時代の中学生たちに与えた影響について考

えてみたが、最後に一つ今日ではあまり知られていない「アップルトン」という英語読本の影響について考えてみることにしよう。その読本に対する言及が見られるのは徳富蘆花の『黒い眼と茶色の目』という、彼の同志社時代の生活をもとに綴られた自伝的小説である。その一節に、主人公の敬二がヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を英文で読むくたりのがあるが、そこにはこんなことが記されている。

《兄の家塾は特別に文章を奨励したので、十六七では経国美談自由之凱歌様のものから浄瑠璃本何くれと読みあさつた。其後も新刊の小説や翻訳本は教限りなく目を通した。海外の小さな物語の断片もをりく教科書で見た。然しまとまつた西洋の小説に接するのは、*“Les Miserables”*が最初であつた。……彼は何事も一気に為では措かれぬ質であつた。知らぬ新語や不明の句はどしく飛ばしてずんく読んで往つた。……ジャン・ロルジャンは黒雲の様な顔で舞台をみしく云はして現れてきた。……一枝のペン先きに千軍万馬を躍らすヲオトルルウ大戦の雄麗な描写は、曾て寿代さんから借りたアップルトンの第五読本で、沈田先生の教壇に聞いた。》（徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』『泉鏡花 徳富蘆花集 二』現代日本文学全集54（筑摩書房、一九五七年）三六七頁）

ここに記されている「アップルトン」の英語読本というのは、「ナシヨナル」や「スウィントン」の読本同様、アメリカで作ら

れた教科書であるが、日本では一般にはあまり流布した形跡は見られず、当時の書物に詳しい木村毅も「私は表紙もみたことなく、いつか同志社図書館にいられてもらって調べてみたいと思いつながら、まだその機を得ぬ」と書いたまま、最後までそれを果たさずに終わったようだ。日本の書店の手で翻刻書が刊行されたという証拠も見あたらない。唯一、東京大学の明治十三年の『図書館洋書目録』<sup>6</sup>に、その巻一から五までが所蔵されていたとの記載があるところから、明治十年代前半にはすでに原書が日本に入ってきていたことが推測される程度である。

したがって、そこにどんな文芸作品が掲載されていたかは目下のところわたしにもわからないが、幸いなことに、敬二の『オトルルウ大戦』に関しては、「ロングマンズ」の『第六読本』に同じ『レ・ミゼラブル』中の「ウォータールの戦い」(The Battle of Waterloo)という一文が掲載されているため、そこからある程度のことは推察できる。「ロングマンズ」の読本に載っている「ウォータールの戦い」というのは、『レ・ミゼラブル』の中の一八一五年六月一八日のナポレオン軍の戦いを抜粋したもので、手もとの英訳本などと突き合わせてみると六月一八日の戦い全部ではなく、さわりの部分をとどこどこ抜き出してまとめた文字通りの抜粋である。この時代の英語読本というのは他の読本に掲載された作品を再掲載するということもめずらしくなかったようだから、恐らく「アップルトン」の読本に載った文章も大体はこれと同じものであったと考えられる。

ではその内容はどうかというと、英訳をさらに抜粋したものとはいえ、さすがはフランスきつての名文家の文章を基礎としているだけに、その筆遣いには凡庸ならざるものがみとれる。とくに、イギリスの歩兵連隊が鳴りを潜めて待ち受ける高台にナポレオン軍の兵士が駆け上っていく次の描写は、敬二がそうしたように我々も固唾を飲んで一気に読み進まずにいられないところだ。

They listened to the rising of this tide of men. They heard the increasing sound of thousand horses, the alternate and measured striking of their hoofs at full trot, the rattling of the cuirasses, the clinking of the sabres, and a sort of fierce roar of the coming host. There was a moment of fearful silence; then, suddenly, a long line of raised arms brandishing sabres appeared above the crest, with helmets, trumpets, and standards. It was like the beginning of an earthquake.<sup>(7)</sup>

〔参考までに右の英文に該当する箇所を掲げておくと次のようなものである。〕

《かれらは、人間の潮が駆けのぼってくる音に、ただ耳をすましていた。三千の馬のしだいに高まってくる音を、大速歩の左右交互均斉のとれた、ひずめの音を、胸甲のすれる音を、サールの音を、荒々しい、なにか大きな息づかいを聞いていた。おそろしい沈黙があった。それから、突如として、サーベルをふりかざした腕の長い一列が、高地の頂きにあられ、軍帽、ラッパ、軍旗、灰いろのひげをはやした三千の顔が、「皇帝ばん

「さい！」とさげびながら、あらわれた。全騎兵隊が高地の上にあふれ、まるで地震のようだった。(佐藤朔訳『レ・ミゼラブル』)  
新世界文学全集10〔新潮社、一九五九年〕二九八頁)

敬二のいう「二枝のペン先きに千軍万馬を躍らすオトルルウ大戦の雄麗な描写」という表現がまさにびつたりの律動感に溢れる雄勁な文章である。彼はこれを「曾て壽代さんから借りたアップルトンの第五読本で、沈田先生の教場に聞いた」ということだが、この小説に名前の登場する人物は壽代にしても沈田先生にしても、実在のモデルをもとに描かれた人物であり、沈田先生は明治・大正期に活躍した政治学者浮田和民、そして壽代は、表題にもなっている「茶色の目」の持ち主にして「彼の破れた初恋人」といわれる山本久栄であった。つまり、蘆花は初恋の人から英語読本を借りて、浮田和民の授業で「ウォータールーの大戦」に関する文章を読んだということになる。手もとの『同志社英学校／神学校規則』明治二十年五月発行という資料には、その「三年生」三十三名の一人に蘆花の名前が掲げられ、「職員表」には浮田和民の名前が挙げられているから、蘆花がここにあるように実際に浮田の授業を受けていたのは間違いないものと思われる。それに対して、テキストのほうはどうかというと、同じ資料の使用テキスト欄には、「アップルトン」という名前はなく、代わりに「モックゴフヒー」というリーダーの名前が掲げられている。つまり、当時同志社で使用されていたのは、アメリカの William H. McCutney が編纂した英語教科書であって、「アップ

ルトン」のリーダーではなかったということになる。ということは、蘆花はそれを誰からか借りて浮田に読んでもらったという可能性が高く、この明治二十年当時の同志社規則書は、上に引いた記述がおそらく蘆花自身の経験をもとにした実話であったということを裏づける一つの証拠ということができるのである。

自伝的色彩を色濃く漂わせたこの小説で、私が最も興味を引かれるのは、そこに垣間見える蘆花の同志社時代の読書体験である。久栄から「アップルトン」のリーダーを借りて読んだという明治二十年当時、蘆花は初めて本格的な洋書の購読に取りかかり、『レ・ミゼラブル』や『ポールとヴィルジニー』などを英語で読みはじめるが、それ以前の彼の欧米小説に関する知識は、もっぱら翻訳小説と「教科書を見た」「海外の小さな物語の断片」の二つに頼っていた、そういうことがこの自伝小説からは読み取れる。翻訳小説と英語の教科書、恐らくこの二つが蘆花のみならず明治十年代、二十年代の中学生たちが共有していた最も一般的な外国文学に関する知識の供給源であったと思われるのである。

### 終章

以上、明治十年代から二十年代にかけて青・少年期を過ごした作家の作品に現れた英語教科書について幾つかの観点から考察を試みたが、この考察を通して明らかになってきたことは、まず第一に明治期に英語教科書が担っていた役割とその果たした使命の大ききであらう。ここに掲げた作品は、徳富蘆花の『黒い眼と茶色の目』に



しても、木下尚江の『良人の自白』や永井荷風の「歓楽」にしても、あるいは長谷川如是閑の『ある心の自叙伝』にしても、すべてが、自己の青・少年期の内面を赤裸に綴った回想記、ないしは自伝的小説である。そうした当代を代表する作家やジャーナリストが書きとめた自己の精神史のなかに、英語教科書は無くしてはならない重要なファクターとして登場する。時に、それは自己の恋愛観を形成する精神的糧であり、また時に、将来の方向を決定する予言の書であり、さらには恋人との心を結ぶ仲立ちであるというように、いずれも彼らの精神形成の過程、すなわち彼らの内面史に占める位置は特筆に値するものばかりである。多少大袈裟な表現を許してもらえば、明治期の、とくにその前半の英語教科書というのは、その頃中学で学んだ経験のある人々にとって永遠に忘れることのできない青春の記念碑であったということができるだろう。これは、『英語青年』の編集に長年携わってきた喜安□太郎が伝える話だが、第二次大戦たけなわの昭和十九年のある日、彼のもとに以前女学校の校長を勤めたという七十歳の老翁が訪ねてきて、自分は今でも昔習った英語読本を忘れないといて、『ナショナル第三読本』の一章を一字一句違えずに暗唱してみせたという。このように文筆の手段を持たず名を埋め忘れ去られていった人々の中にも、ここに掲げた作家と同様の体験を有する無数の存在があったことをわれわれは忘れるわけにはいかない。後世に己れの回想記を残した文界のエリートたちにとって、あるいはその背後に存在した無数の記録を残さなかった人々にとつて、等しくそれは死ぬまで忘れることのできない思いでの書であつ

た。われわれは、このように明治の青年の心を育み、時代の精神風土を形成することに多大の貢献をした当時の英語教科書というものに、もう少し大きな関心と注意を寄せてみなければならぬだろう。

- (1) 木村毅『日米文学交流史の研究』（恒文社、一九八二年）一〇七～八頁。
- (2) William Swinton, *Outlines of the World's History*, N. Tsutsuki, Tokyo, 1883, pp.350-64.
- (3) 『東京専門学校校則・学科配当資料』（早稲田大学大学史編集所、一九七八年）四八頁。
- (4) 文部省『学制百年史資料編』（文部省、一九七二年）二二八頁。
- (5) 木村毅、前掲書、三九八頁参照。
- (6) 『東京大学法理文学部図書館洋書目録』（図書館印行、一八八〇年）二三五頁。
- (7) *Longmans' New Readers: The Sixth Reader*. Longmans, Green, and Co., 1902, p.165. 国会図書館には明治二十一年に日本で翻刻された『ロングマンズ第六読本』が一冊所蔵されている。
- (8) 中野好夫『蘆花徳富健次郎』第一部『中野好夫集』IX、筑摩書房、一九八四年）一四九頁。
- (9) 喜安□太郎『湖畔通信・鶴沼通信』（研究社出版、一九七二年）一〇七～八頁。

（かわとみちあき 中央大学教授）